ユ 英氏浮世ぞ夜なれ　メ 月ようなる事也からざるを
ミ 寄郷のまかく関ミ狂ヽシ 無てミし世も浮世なれり
ヱ 蹲道たる酒やをくとなれ　ヒ 此為りんなりんなりてり
モ そくの西名ぱ身にけり　セ 是よむりへてかくよなは
ス 是なるまみの城の事よ　京 はやと田舎と人をみる

家訓奇語上終

家訓奇語

戒性怨已有心　九十二ヶ奇語

天地之間万物ハ何れもみなおのれを
こそいふし にかの有へ 夫其中の
人乃性ハ其易に云乾乃変化して各性命ヲ
正ス保合太和なれ乃利貞下に云て地道ハ厚く
物ハ夫々にして陰陽合沖し
和ぞ気を交負ほ数なし偏ならず
ことかく保合濡住ぞ実に化し此性

天乃元は万物を生する所以の為元にして変して
亨合太和元は亨利貞あり而して
嫌多而を為命物役の執ることは亨多草
斂まて而して実を就の理草を命すり
実者性命を之天乃ハ利貞斂命を保て
性を純にして陰気に離れす粹にして
物悪を離れす而て正にして善之性に率の
仁義禮智の乃人皆其備る所の性乃徳なり
ところ則天道之人事諸物の数精粗を

ことを得しうる所なり而かして気質乃性ハ清濁
の稟あり而して形しすとしハ天稟を知
従しすきて生質乃偏若ハ賢愚ハ善ま悪
愚と賢ハ愚を悔ひの者あまた変化して善と
悪とも本来あけるをもとへ同向の事ま
多を深く変化させる如く物下必外の気と
淡濁精観の異さことし偏とそ示しハ
め絶らん所謂公を害し危と悔の
ら縁らん友あまたちらす化

酒色といふは飲食あるは一酒色は能となる
人を縛るものなり天下を所得の国家の基本
修理するの家なり取る人の性生まれつき善悪なし物に寄
そのなす所ハ見聞する事に依り善悪を変ずべし善を
見てハ遷り又悪を見てハ悪にうつる又古人
学ハ所謂習性相近し善悪とも習ふに依るとし
学ふ所ハ損友あるは所以良友有道以て
道を好まはおのつから善をなさん性を招
道に習ふ又古書にも孔子の語にも明らかに説

流るゝがちやきしめしとて人の流浪
せくなかれ人の人の事なり
謙る人をば人のなし人の心をば是を悪
人の性は善悪にして流浪を損し悪
悪を報ふとし人の人の
いたくしてあまりなし人の長短をいひ
あなかしこ人の不祥を論じ是にて人を嫌ひ
其のおもんぱかり悪を隠して善を揚るは人の
為なり又人を論ずる所謂

Digital image © 2008 University of the Ryukyus Library

有道に就て身を正しくし賢を貴び徳を称
する事ある人は即ち己を善しとし是を交るべしとみえ
また正法を見むものとせざる人は却て己を
悪む人なりと柳沈子が戒子の書に
云ふ賢き人は既に寡して人の学あるを悪む
己に勝れるものは己が顔を厭ひ己に及ばざるを
好むものは是を悦ぶ頭辟に浸漬し淫蔵
を請列して善語むかしくあまとし一斯
表ひを勝らんとす

我身の非しからざる事は
みなことをて分生に脳乃あまり見
人の世に居ると誰石界の門汲を識矣
和平則して世は楽まず父母の教育を悪
宝二の方成あるをりして酒色を好て人より
嘲らるも武士道理を働て人をうらみ
武を争闘を好て人に悪まるも武は己が過
人を損して人に恨らるも悪名世に聞ら
ぬは其の身の驕り天下に有る記

寳を好しうたにかなふ心をえんとて歎きて候事
義を己に是をまなふの心をおれ放辟邪僻の
おこなひをしりぞけ改悔をさせ事を敬して言を
慎しみ仁を和平にして尊長の上をうやまひ上を
朋友を信をもて兄弟和楽慈子に好を遂て
おのゝ楽て人の本の性理にかなへる柳も
勤学文と云父母に教て中あつき孝て施さる
本の子にもあり然是をまなふむと云り
聴とミとしむハ浮世との

く是をかきもさしおかれ此ある學成
君に事ては忠をまなふ是ハ聴をありすむ也
親に事ては孝をまなふ是ハ聴をありすむ也長に
事ては悌をまなふ是ハ聴をありすむ也朋友に云
源をまなふ是ハ聴をありすむ也五義の中に熟して聴て
あり云を文学をまなふ是ハ聴をありすむ也道
を學ぶ是ハ諸侯をまなふ是ハ人のこゝろを歎く
自身の道を勤すん学道ハ人の心かなふと聴きる
是に孟子の句義の心かまハ人のあるすと

あらそひ有とも事を争はんとはおもふへからす所謂無諍
而已たれは人これを以跡なき事を恥とはせん
として中庸に所謂庸徳これを行ひ庸言
これを謹む是なり不足事あらは敢て勤めよ有余あらは
ある事あれは敢て尽す事なかれ所謂言は
行を顧み行は言を顧みよ是を以君子は己に
慥々たるへし人よりおさむるに事疎し
あるへく勤めてもあまりしかるへき方
にもとる人へしかるへしといふ

畢竟録に云こゝろしてたゝ人の事をまもるを
執下云讒家に為家の事なり是は則無之人を
そしる事なく忠ある事は役人の諍を除め
ある道是は則謙として家に云家節あるを正
是は多く取るゝ所君酒飲食に度ある事を貪
是は我人に是よ婦人を好むの私語なり
ある是は還る事なくしてかたく後世にかなふ所
君子不重則不威又云服食に屋を是は是流
もとめ下云也

無きものなれは琉球のよふなるものを見ハ
人の上を見人のふりを改むへき也
范忠宣公子弟を戒て曰人至愚といへとも
人を責るには明なり聡明ありといへとも己を
恕するには昏し爾曹只常に人を
責るの心を以て己を責己を恕するの心を以て人を恕
せは聖賢の地位に至らさる事を患へさると
惟ふに人を責る者ありても恕するの心なし
責るには徒刑するの心にて責るは無慈悲己ニ能

まるものとれは人の能ならさる所を責るは己を
責すして人を責るは道なき己を責て人を
恕するは仁の道也收攬を能するにかきりなる
く最責るにて可なり其能己ましく人の至善
論に従ひ己をまてるの類く[illegible]文母をまもる道を
[illegible]己を以て人を親まるは恕の道也
中庸に所謂子に求る所を以て父に事へ臣に
求る所を以て君に事へ弟に求る所を以て兄に
事へ朋友に求る所を以て先つ是を施すの類也

色をとらぬ人ハ善人なりとおもへとも何を教ても
聞ず見ずときゝめ迄もなくしらず此様にしては
其身の悪路より草葉に流ゆ
大学に云天子より以て庶人に至るまて壱是
皆身を修るを以て本とす其本乱て末
治る者ハあらすといへり此意ハ人の父兄
たる人家の主ハ権柄を持て子弟に善悪を分
の善悪によらんや又父兄孝悌謙譲を行へハ
一家孝悌謙譲の風を興し又父兄貪暴

行へハ一家貪暴の風をおこさん父兄倹約を
すれハ一家倹約の風俗おこらん父兄驕逸を
なせハ一家驕逸の風おこらん父兄仁徳の
教を行て一家慈愛の風おこらんか為に
論語に上君を親とするとき民善おこらん
君子の徳ハ風也小人の徳ハ草也草ニ
風をくハふるときハ必偃すと其悪路ともを孔子の羅
あるとし其身其家ハ御行を
初まりてをさまるへきか上にあらず

夫ゆへ人々よろしからむ數盛の朋友あり御堂の
朋友ありし時は深く交ある人あり是又交の大要を
志ほ思ひまる此ならひは人は思ひを少し人をさと己す
思ふれは女善は貴ぶは朋友の友なりとも知て
人の擬義をたてまして善は貴ぶを主とし
都くは諫言は来るも耳に入て柳の風に
木の如く靡く折痛にする事なく人に交る
如く和中に康身は主人に与ふる人を得て
明かにしけるよ君人は花を生けて人を含さ

得く和らいさゝかの事も取敢ずにして
安行き敷人随文を取ら渭要人をも觀激滞
杯まする事能ゆ押領すともひたる人の
乞眺て激滞するして機に人はたまる次
の大要なりと
志まし たゆまりてこら思ひまをよ
宗の都は枝の敵乃に
飄漂浮水底の魚天邊に雁ある付きハ
一獨非なる人に を照人のまよわさして照へ

Digital image © 2008 University of the Ryukyus Library

人金は料天を一斉にして地を一に覚悟
仏を諸方に遣りしより虎を書画
役を為さしめ骨を為すとが見えしをもと
知より西を知りく仏経にて西を崇しく
世より流まてもし仏を千里に満ちしと云ふ然
地の中にてもかの法をのみぞ人知る天地を驚
遣ったといふとし理をは曽ても是ハ云ふと是非
ならん人知識の道理といふとし内に化
まで信じ申すかはりく世人の機変を
始めんと云う其儀を持ちて数多を大事に
人あり歌舞を学ぶの為に悲しく実異の根本
それ道ほく人あり、彼をもって変て阿
取らんとまる人あり、是に虚実名利の激
ことく人の機変をもらうすくして数を
彼は傍ら人その数より偽をあらわすとを聞
知らず親友のまあく取りよかく人古今
歴ここまでかより取又論経にし漫閲の讃
文の懇行のほ一なる聊としまで老といふ爾

いへるひと孔子の辞して
為たまはくて、聖あめさまたりと
世界のえ木にしまし候也
孔子欲語て云出しし老氏云為す初て
孔子云為すせしと云ら出てあやしと候
仏と申すもの是は虚木の精の魂をふてあるを
得るがごとくにみつし老子治らん右ま
おのずと貴の欲にて老の仏出候
欲とあるて以外尊者にんしん事也

濁没にて老を言じ等閑を…
事どもに…を尽して記し事…を
以て見ぬし老木の精にて此すまるが如く老の
仏心にして遠く欲に随ふたよるを為
の要用と仏の教にし湯王世子を載…
の書に同意とよるし老を以て見て
をんは老の道をいふ云是上経の人
新なしく和解あるとはまして
おかしく候也

酒ハ一ニて百毒の長と云も論しへの
あまた用ゆ又酒帝との名あるもしき
花晋公賢酒を我家の詩を作く跡子居く
あらしこもる詩を詠ん酒を好む事也 猶
楽則りて住傳をあらす見浪厚の質ぞ
梅化し性滄の花と云古今顔絶ま
こその歴くたゆ皆花とかても漢酒の将業
うるや蓮賢ハ愛し哉を試法歌ま
濡れハ好ミ哉を道学は究し宿ゆ

祇祥にあすえての数も酢ゆへ多く道を
一勝六騎人もかをも歩めく風流佛
あまと云り帳ある渡して君の物様く
病ひとあるときをハ内儀経命ともれ
味の禍の端しも成ゆる人酒ハ我のと絶
様うるもともてくわれあましゆ方に
愚んもめ活待るへ乃ふりし又
嫌語云其の財ハ貴しく心ハ破と云り
其道の此をもり又人嗜欲を知もへ歩きと云

商ハ詠ハ飲食とおもへ共此ハいまたなし如くハ
浮禮よ好しく縁のまゝにて到り身を損る
身ハ分ハ云ふ事情樂を親ハ古の事をいふ
いふる人ハ多く人生る處て甲斐なく已ハ思道
臨淵の内を道ハおもひ込くも其ま足をゆく
人ハ鞁の道助き源の分ハ衆ハかうす説
足をゆかして情意諫しく父母臨ひかと
人ハ我ハ其人ハ漢書ニ云賊ハ其父母ハ爰ハ
賊をてかして諫しても其ハ叔父ハ現是なる
衰とかりして終よ其情をも此方ハ我ひとも
未たす父母の懸骨ハ身を二の我ハ忠孝
一辰の恩ハ墓ニ之身ハ我ハ氣をかさるの也
鳴呼是を嫁まるへからざる是をなかの
身をうしなふとおもふ人ハ我をおもふて
たゞ爲におもふ人のためにあらし
家道ハ親ハ之道ハ我ハ食ハ三ハ子ハ家
然ハ此道ハ禮義ハ分ハ賊ハ禮義ハ
あしき賊ハ父母道ハ子孫教育ハ失ハ家

教育せざれば久からば色衰へ慕ひも衰へ是に逢て
撫育なきのみか況乾に所謂敬せば治るをや
執らしく家を能ハ力を竭すのみならず
中一敬ハ和睦せしゆへに名精をも尽し
大学に所謂敬ハ是にあるや太夫の家は敬する
ものハ女も是を食せざる事也の
家をさると入ると云事常にもの也と云々
日用の事ハ一家族を見て見るへし
明心宝鑑に云く或ハ家を云ふ

父母居ると家を楽しむ事
事あるのみ福を共にし其況や太公
の日家を重んじ人の徳の如く有る家の寡
そのハ国の民あまねく家をまかる十遷二耗
あまねく達十遷を将て親しく収むることを為
一遷収むは積とてなることを為一遷に事を施して
施して寝睡ことを為二遷に懶惰して耕
為工力を施さることを為あり窮の害
なることを為二遷として女を為七遷

嬲も親子に為ハ淫酒に貪り驕に惰れ倉
淫の獲溢しく嬪媚に引汲為十塩三綱倉
庫漲に漏しく扨も何乱存孔子食
まヽに為一絶収察絶ら上への時代ニ子に為
二綱を敷に縦勝之拋擲ものを為二綱武
王の功くふあらる故に嘉きの孫とも
枝也をりましくと豈申奉右す上へ三往
記し其冥ニすり上無きの乃あるへし
父乃父母兄弟孫あらや亦其乃本枝あり

慎
如し世と根本を一也衆ら子孫代あまり良代
々に拙し祖宗の典それ々みを道を待る道
積の子孫政を以親睦之お戒も同根の情義
知りへ一方代を以して以んも必孫の祖輩
代兄弟又異にして如も宣親睦を楽しし
偕此しを思ひとしてあに作るにと本原の事業あし
あまり故ニ花文正公子孫若と同世に云ふ
代宗祖を家し古今圓を親睦あるを傳
とし其祖宗に自と視猶へ八則是均子孫也

Digital image © 2008 University of the Ryukyus Library

云報謝之前よ祖宗乃神云報謝とは云
則ち是職分の安きを恤まふるをいとはん也
祖宗ハ其このとし德にたよる百姓を本として
而して治して教を發して大倉ニ富もとして
將又君主稱して寡きを寧しとして家族の
恤ましんハ數日にして祖宗ハ能く地下に
物の如く今ハ其の類あるにて飯を食ふ
思恩例ま賜ふる人に均しく並ぶ
義田宅をも重んじて云り

誠はかく思ひは神ならは護らむ
目にみえぬあてにむかひてあらはるゝその
孔子の曰く本として教を發し惕と聰明叡智
情慾ひとかとも是百慮の情之神乃荒みありと
の動くは是道德の遊度能はざるなり
中庸ニ鬼神の德たる其れ盛なるかな
之を視れども見えず之を聽けども聞えずして
之を物に體して遺すべからずと云々
云ハ鬼神其の德あるを稱讚す

Digital image © 2008 University of the Ryukyus Library

形声を部ときと云ふ、しかも其の幽霊をなる源
鏡は魄のかけ門り、照らすがごとく物に似たるは神を
神とせ云ふ、これによりて其れを安敬せよ
義ここに鬼神萬古を透通して盛ならし
須ふ、物とりふきる自然の実此して玄京天の
賦分而稟代らける所の幽理なる気に中庸して
物とりふを天の名為すとと云ふ、五色を物にする
ものは人の名前にまし、名為自然の源之徴部
字とは大名為自然部にすけ物部衆理

自然偏りなく中庸に而精魄をもって中庸
思ひ考へて物にあることは、徴の
精人の精魄の精気に依くして天地の純精徴
なるは其の徴天地と並立して天地と云ふ
為りと云ふ、徴の精なるの物なるとも物部
物色の部を被る徴鬼神と交通をなさんとし
社稷山川の神は百魄の精也、人家の神
先祖の精気人を天地の気とともに精魂
訓ふ本生来し精魂魄の部なり

云経乃魂魄を天地陰陽一氣にて陽を魂と
陽也神とかうし魄を陰之鬼とかうしたるは
天下の人官ともさとく先生の流を学ふ
者は学者の人をも同しくうけ神と名つけ
神と云へしくうけたる是ハ三ト宗是ハ三ト云へく
うけたる是誠乃心を取てさまへし
甚くしも是取をもくまての中庸にハ
いかふへく取ても神にも仏にも
学者性情乃止處にて学者の誠をはいふ人

誠を學ふ人かならハ鬼神をも云ふ其人と理な
自然なる鬼神なるこそ正靈なりとかたきを
ふかく人道の私をはらふ人なれはハ還て人を導と
かならんてまこと人おのつから誠なるへし
かくし一誠あつく我心取もあらハ我心也と
取也是誠をいふ也とへおのつ彼離ある
我心取も我心也とし我為ては揺ける思
為人是誠くまてて所謂其名を
時乃理なり編て誠は得しく其誠な

ふきハ霊魂ニ乃内ニ数ん増ん益ニ書ニ請
私に見へく積くかゝかゝるをハ祭ニ而
積く見へく私に帰思非る元も直ニ随ニ而
中庸に所謂微而之直随を顕而しといふ者
是其理也
是形乃道二ぐぬまたなるとまさに見へく
あまりこ酒自そく極めここもこ面ら
尸位とよく順武も祭る國家の積を贅ハ
先祖人の生存ぐへわく元氣元乃たなるり

家國家ここを元氣の?く??敬ふ命令
人へハ禍害とあるへハ豊穣の瑞祥を成へ而
是又と謂るくらゆかし禄神を祀ぐ
是まゝと人の甚きてあらまし禍福吉凶を
天乃所職の命とを所由の謝とを所以道
とを所宅の報而を神乃ゐをとこに?なるか
家道ハ病くとハ醫藥を請く治め難き
性氣の自ら賀くとハ留とも禍と附
與其名合とん同氣神を祈たる

Digital image © 2008 University of the Ryukyus Library

[illegible]尚[illegible]て新し神明家[illegible]して[illegible]

通乃[illegible]幾[illegible]勝ち財乃盛衰[illegible]

幾は家の神を論し[illegible]て永く子孫[illegible]

かりうしし代々て御[illegible]して[illegible]

祭[illegible]へとも五則天地乃富いたる

邪かしきて家にていえん[illegible]かりし者

可除乃神をおいてくれ也

財宝守勤說

抑も治世を小事ら覚悟して[illegible]

[illegible]の本家[illegible]

[illegible]かくら[illegible]要色の[illegible]にし[illegible]人[illegible]

貴賤[illegible]色めて[illegible]財[illegible]

それあさまし財人の楽し[illegible]財[illegible]

おもをたり[illegible]宝[illegible]

むけし云の家[illegible]記[illegible]

跡を絶して全とする我家理[illegible]

かくて財[illegible]

[illegible]若を[illegible]また[illegible]

[illegible]

然るに於て宗祇の筆あり　聞書と宣旨紙あり
讃岐院のひ出ねども浮世をし西行か詠
むしろをためし大事の讃岐の此
あまの世をわびぬる人やあるらむ
むくまたいひそてこと指南をいとて
池田論うらひとのしき
時宜人情口説
此よの浮世乃分ちこや　ことと見きこゆ引歌る
思ふ事も人の本歌　後すむの色わらら
むかしまつかと願ふる　遊さくうつ神へくも
いかなるにやひとそ理な聖　あるまへうてなれしなむ
人ちにぬきて称し　怪居智も人はあさ宿む
よきいあれてて爲にすべし　まそのさかれ人のき
常此処由緒人たつ　ときの由緒をそか
うるふくもとひ六　人の跡しとう
花乃句とつきらし宗祇　時ともつれなく
秋の月見え心なに白露のこほれてける
うきこそ身の露をしりありつけし

總奇證

朝夕に聲を耳にふれて心よくうつりたる人の心にうつ（？）く
かなしともおもしろきとも分たぬ事なれともかつ（？）
余習ある老子の孔子を送りしに言ばかりを富貴
者はおくるに財をもってし仁者は人を送るに言を
もってすと云（？）ひし事をも心得て仁者のならひ
にしたがひて忠をおもひて慎（？）みて
其心を守りて千里万里をへだてし人を
寄せて心をわかちて慎みて善道

属する事なりて一道一路一文字をもしる事（？）
新古風乃書にいたる書籍を考へ時宜を
察し非礼視ることなかれ非礼聴ことなかれ
非礼言ふ事なかれ非礼動くことなかれと孔子
の教へのごとく口にて慎むべく言忠信行篤敬
内外につつしみ本意を道を善とし悪をしりぞけ
三つの境界において人の成敗をわかちて寛（？）
常に善悪をしり言葉を切にするか如く礼
まことに如くするの如く思ひするとも

ら俄にてらかにとそ別して滅安の公塔
君命已に別して事として君は而帝の息後
隆宗して君か家俄にて国勤くおほしけれ
君又まして而さへ家而将をもて許郷
七月歸還して若くいまた若幼少にて家臣
壮かりしかれん我にも家臣日夜にして
二十一歳 癸 年春乃五月に父を失ひ母に仕へ
まもしいやまし一息も報いむすまじ男我致
しく当命に隨ひ涙ながら父の後に家を安置

様を敬して紛て万事無難而いまぞ
安否をは国へ出入おほく無らせて思ひ知
ことさらに君夫のとく送帰をも思ひ続こさまは
度出して運をは延さ又誰を執くや
申しくはる事をは何も且おかしたまはず而ね
隣とるといへとし前に於てもすこしも
の色には葉新の憂をもあらそひとし食あける
にさき起て涜く散し食をもあたへけ
とく膳の長をも守ひ食ともに膳をも家而

Digital image © 2008 University of the Ryukyus Library

尤見くはしく嫁ぐる家の道徳ありて
進退礼儀共によく親族の道理
難徳ありてもこれを悟らず家を乱し其吾
長女母これを見せもせず家の名を吾申し
これ候事を二十歳の誠しれば過ぐ
外にもなき所ある人の理を直に責
聊も仏道を申し候人も有れば
おもひ且善心を発し本性の元を恥
あくまでもおもてふかき所ありて正しと申

壬申春は三月交易は吉日吉凶禍福の事
六月都の海を取りて害に病の吉凶を見る
万一西を吾家事有ると生涯に所にて
善を取り備へ国家にたゞ一時の難に
海の為に身も寿命長く
命は力を失ひ利得の吉凶
たゞ心を守り身を安んじ
情を以て且はその心を正し
日々の

一石源蔵のむすこを祈し無祈久
しきものの理と…今年廿歳
二月卒し給ひ悼惜何ぞ是に落れ身ほに
生て再会の期をもつ事もなし…
有ける…霊前に涙を流し…
痛て…数日落れ…食を…
…思ひを致て酒肉…
…深く…の事を…
…若…

依ての君恩をも来し君の恩…深く
父母に能孝順せし…父母卒せし
壌追悔をもし…且見…
一體の情意動き…
苦勞を致す而忠ならぬ…
此忠とかく…
家の事を視…父母の…
淵遠…今…深く…の…
心所に識しと…

Digital image © 2008 University of the Ryukyus Library

歌詞[illegible]下終

右二巻者蒙私維之能〻漏延
故訓過而世人之見所以後甚斟酌之也
所見者古事奏ハ清朝之将作意所之書写
写之清流清定之清定之評論
之為[illegible]電書[illegible]理筋仮名遣句
相当[illegible]清見耕之縦之所之一[illegible]
帝たゞ[illegible]

下
吉仲様
前長（花押）

[illegible]

同治七戊辰年二月吉日

用紙四拾三枚

松茂氏

當親

箇開書とと

錦書之錦かうて

三四ゆくらくら

錦あ、もしもて

どの

まつのはなす[illegible]

Digital image © 2008 University of the Ryukyus Library